
続、小説・人狼ゲーム（解決編）

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続、小説・人狼ゲーム（解決編）

【Nコード】

N4266L

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

銘々が生き残りをかけて、互いの正体をさぐり合う人狼ゲーム。心理的なかけひき、攻防が交叉する中で、あなたは冷静な行動を選択することができるだろうか？

読者への挑戦状を掲載した本格推理小説。

五日目の出来事——後編（前書き）

「続、小説・人狼ゲーム」は、出題編、解決編の2部構成になっています。

解決編では、出題編の最後に記した読者への挑戦に対する解答が書かれています。まだ、「続、小説・人狼ゲーム（出題編）」をご覧になっていなければ、出題編、解決編の順番でお読みいただけるようお願いいたします。（作者）

登場人物

アイリス	（I）	若い女性
ミスズ	（M）	司会者（若い女性）
アメンボ	（A）	青年
ボス	（B）	老人
チイ	（C）	少女
ドロシー	（D）	少女
エリカ	（E）	若い女性
フォックス	（F）	年齢不詳の男性
グレイ	（G）	中年男性
ヒミコ	（H）	美人
ピースケ	（P）	青年
クイーン	（Q）	中年男性
リヨウタ	（R）	少年
シノ	（S）	老女

五日目の出来事——後編

五日目の夕刻

ようやく私は心を決めた。この部屋割り指名で、アメンボ、ピースケ、シノの三人から誰を選ぶべきかを……。

M「アイリスさん？ 今晚のお相手をご指名ください」なかなか私が発言をしないので、痺れを切らしたミスズがうながした。

I「はい、では……、ピースケさん——でお願いします」はつきりとした声で、私は告げた。

P「えっ、俺ですか？ ……わかりました」俯きながらピースケが返事した。

M「では、残ったシノさんとアメンボさんが同居となります」

五日目の部屋割りは以下のとおりである。

春の間… アイリスがピースケを指名した。

夏の間… シノとアメンボが同居した。

本日の死者は、リョウタ（夜間死）、チイ（夜間死）、エリカ（集団暴力死）の三人だ。人狼でただ一人の生き残りであるアイリスは、もうパスができない。狩人たちの到着まであと残り三日である。

五日目の夜

春の間に入ると、まず先にピースケがソファにどっかと腰をおろした。

P「上手くやりましたねえ。畜生！ もう少しだったのになあ……」いかにも残念そうな口調でピースケがぼやいた。

I「運が良かっただけです。最後の部屋割りの指名権が、たまたま私に転がりこんでただけ……。そうでなければ、皆さんにもチャ

ンスはあったと思います」私は本音を漏らした。

P「なぜ、昨晚に俺を襲わなかったの？」

I「昨日は確信がなかったから……」

P「そうですね。チイさんが亡くなったために、あやふやだったいくつかの疑問が今日になって明らかにになりましたからね。生き残った四人はみんな気づいているでしょう」

I「じゃあ、四人ともお互いの職業がわかっていると……？」私は訊き返した。

P「ですね。シノばあさんの職業がちょっとあいまいだけど、多分狂人でしょう。だから、みんな確定！」

I「だとしたら、最後の部屋割りの指名権を獲得していれば、四人全てに勝利があったと？」

P「そのように思いますよ。あなたが指名権を得た時には、俺を指名するのが正解です。すなわち、あなたはきちんと正解を出しました！ もし俺が指名権を得ていれば、シノばあさんを指名すれば勝ちですし……」悔しげなピースケの声が、狭い春の間に朗々と響いた。P「シノばあさんが指名権を得れば、アメンボさんを指名すれば、人狼チームの勝利ですよね。そして、アメンボさんが指名権を得た時には、ええと、これが一番ややこしいよな……。彼はまず俺を指名します。そうすれば、あなたとシノばあさんは同士討ちとなり、六日目の生き残りはアメンボさんとアイリスさんと俺の三人になります。お互いの職業はバレバレですから会議での議論は無意味です。あとは集団暴力投票で勝負が決まります。俺が吊るされればアメンボさんの勝ちだし、それ以外の人が吊るされれば俺の勝ちになりますね」ピースケは淡々と語った。

I「じゃあ、そろそろ夜も明けてしまうから……」私はピースケに向かっていった。

P「どうぞ、おかまいなく」ピースケはもう開き直っている。

私はピースケに襲いかかった！

六日目の出来事

六日目の朝

M「昨晚の犠牲者は……、どなたもいませんね！　では、会議に移ってください」

まずピースケが前に出た。P「シノさん。あんた狂人だろ？」

S「はい、そうですよ……」シノはやさしく返事をした。

ピースケはアメンボの顔をチラッと見た。P「だったら、もう昼の会議は無意味だろう。俺たちの正体はバレバレなのだから……。さっさと投票に入ろうぜ！」

S「ピースケさん。私とアイリスさんには、あなたを勝者にいれなという選択肢も残っていますよ」シノがポツリと呟いた。

P「うふふ、妖狐崩れをいじめるというのですか？　結構ですよ。ただ、その時はあなた方にも多大なリスクが生じますね」ピースケはひるまなかった。

I「そのとおりです。大丈夫です。私たちはピースケさんを見捨てることはしません」

P「それを聞いて安心しました。では、投票に入っているですね」ピースケがいった。誰も反論する者はいなかった。

六日目の集団^{リンチ}暴力投票はアメンボに三票、シノに一票が投じられて、アメンボが犠牲者になった。集団^{リンチ}暴力が終わると、ミスズは宣言した。

M「アメンボさんが亡くなったので、村人側は全滅です。妖狐はすでに噛まれてしまったので存在しません。すなわち人狼チームが……勝利です！」

総勢十四名のゲーム参加者が、続々と広場に集まってきた。

感想戦

感想戦（この忌まわしい事件の真相は……？）

M「それでは、ただ今より感想戦を行わせていただきます。まず本日の参加者の役職を公開しますね。人狼は、チイさん、グレイさん、アイリスさんのご三人、狂人は、クイーンさん、リョウタさん、シノさんのご三人でした——以上六名が人狼側です。続いて、祈祷師が、アメンボさん、エリカさんのお二人、牧師はドロシーさんが一人、村人はヒミコさんの一人だけで、霊能者がボスさんとフォックスさんのお二人です——以上六名が村人側でした。そして、ピースケさんが妖狐でした。それでは、皆さん、ご自由に感想をおっしゃってください」

最初の発言者は、やはりエリカだった。

E「えーと、ピースケさんが妖狐だったの？　じゃあ、アメンボさんは嘘をいったことになるのよね……。もうなにがなんだかさっぱりわかんないわ！」

A「五日目昼の会議では、僕とエリカさんが吊るされる最有力候補でしたよね。生き残るためにも、あの嘘はやむを得ませんでした」アメンボが弁明した。

E「あなた、あの時どこまでわかっていたの？」エリカがアメンボに訊ねた。

A「では、説明させていただきますし。僕の職業は祈祷師です。したがって、四日目夜に僕の目の前で亡くなったリョウタさんの死因は自殺です。したがって彼は狂人であることになります。そして同じ夜に、夏の間ではチイさんが死亡しました。同居人はエリカさん——、あなたでしたよね」

E「そうよ、それがどうかしたの？」エリカがいい返した。

A「以上の事実から、チイさんとアイリスさんが狼で、エリカさん

が祈祷師だと断言できるのです！」

アメンボのいうとおりなのだ。私が五日目夕刻に気づいた重大な事実とは、生き残った四人は、つまりアメンボ、ピイスケ、シノと私は、私が人狼であるとわかっている、ということだった。

A「人狼は全部で三人です。それでは、五日目の昼の時点で人狼でない」と推論できる人物を、これから順番にあげていきましょう」アメンボの語り口はまるで名探偵エルキュール・ポワロのようだった。

A「まず、ピイスケさんです。彼の初日の同居人はボスさんとリヨウタさん。二日目の同居人はシノさん、三日目の同居人は僕でした。そして四日目はシノさんとアイリスさんとの三人部屋です。さらに、ピイスケさんは四日間とも同居人から死者を出していません！」

E「ちよっと待ってよ。それだけでは、まだ人狼の嫌疑からピイスケさんはずせないわ。四日間のうち一日はパスをして、残りの三日は仲間の二人の狼といっしょに泊まったか、あるいは妖狐に噛みついていればいいんだから」

A「そうです。しかしどちらにしろ、ピイスケさんは狼同士で夜を共にしているはずです。つまり、もしピイスケさんが狼であるならば、彼と同居した人物の誰かは狼でなければなりません！　そこでまず、初日に同居したボスさんとリヨウタ君とピイスケさんの三人全てが狼である可能性から吟味してみます。狼は全部で三人ですから、このほかの人は人狼ではありません。したがって、二日目以降の三日間でピイスケさんは狼と同居していないことになり、パス一つだけでは過ぎせないで矛盾します。よって、この可能性はあり得ません。次に、四日目に同居されたシノさんとアイリスさんとピイスケさんの三人が狼である可能性ですが、ピイスケさんは二日目にシノさんと同居しているのでその日のパスは消費していないはずです。しかし、初日と三日目は人狼とは同居していないことになり、僕とリヨウタ君とボスさんのいずれかが妖狐でなければ、ピイスケさんはパスを二回することとなり餓死してしまいます。故に、僕かリヨウタ君かボスさんのいずれかが妖狐であり、なおかつピイスケ

さんはその妖狐に噛みついています。しかしこの時アイリスさんも狼ですが、彼女は初日と三日目にチイさんと泊まっています。チイさんが狼だとすると狼が四人になって矛盾するので、チイさんは狼ではありません。つまり、狼であるはずのアイリスさんがパスを二回していることになり、この可能性は矛盾をきたします。すなわち、シノさん、アイリスさん、ピースさんの三狼説も破綻です。結局、ピースさんが初日と四日目に宿泊した三人部屋のメンバー全てが人狼だったという同部屋三狼説は、いずれも破綻しています。次に、ピースさんが初日と四日目の三人部屋のいずれかでパスを一回行つて、もう一方の三人部屋では同居していた妖狐に噛みついたという場合を仮定してみます。その時にはもうパスが残されていないから、必然的に二日目と三日目の同居人が狼でなければならなりません。すなわち、シノさんと僕のアメンボが狼であることになります。しかし、そうすると今度は、僕の初日から三日目までの同居人に死者が出ていないので矛盾します。なぜならば、妖狐はすでにピースさんに噛まれているので、僕が初日と二日目の両方でパスをしてしまうからです」

アメンボの推理は理路整然としていた。私たちは固唾を吞んでその説明に聞き入った。

A「以上でピースさんが狼でないことが証明されました。そしてこの証明は参加者全員が推論できることも忘れてはなりません」

C「参加者全員が推論できる、というのがすごいですね」チイが感心していた。

A「そうですね。僕にしてみれば、四日目の同居人のリョウタ君が狂人であることはすぐにわかりますし、僕が狼でないことも知っています。当然、ピースさんが狼ではないことはわかります。でも先ほど僕がした推理は、参加者の誰もが導ける結論でもあるのです。さらにピースさんが狼でないという事実を使えば、シノさんが狼でないことも証明できます。ではシノさんが狼であると仮定してみましょう。ご存知のとおり、シノさんは二日目と四日目にピース

さんといっしょに泊まっています。ピースケさんは狼ではありませんから、シノさんが二日目と四日目でパスをしないためにはピースケさんが妖狐でなければ矛盾してしまいます。しかし、たとえばピースケさんが妖狐であってもピースケさんは死んでいませんから、二日目と四日目のいずれかでシノさんはパスを必ず消費しているはずですよ。するとシノさんはそれ以外の日にパスができないので、初日の同居人であるヒミコさんとフォックスさんのお二人が狼でなければなりません」

G「その際に、なにか矛盾が生じますか？」グレイが興味深げに訊ねた。

A「はい、シノさんの三日目の同居人はヒミコさんとグレイさんです。そして、ヒミコさんが死亡しました。でも推論ではヒミコさんは狼でなければならぬ！」

G「問題ないでしょ。私が祈禱師であればいいのだから。実際は違いましたけどね……」グレイが口を挟んだ。

I「あっ、そうか！ ヒミコさんがグレイさんにかえりうちで殺されたのだったら、シノさんはパスをしていることになるんだ！」思わず私は声を出していた。

A「そのとおり！ つまり、シノさんは三日目の宿泊でパスをしないためには、ヒミコさんをかえりうちにしたグレイさんを襲って殺していなければならない。グレイさんが生き残ったということは、すなわち、シノさんが狼でないことを意味します！」

I「すごいー。これで、ピースケさんとシノさんの二人が狼でないことが証明できちゃった！」私は歓声をあげた。

C「わくわくしちゃいます」チイも喜んで聞き入っている。

A「さあ、四日目の夜に生き残っていた七名のうちで、ピースケさんとシノさんのお二人が人狼ではないことを証明いたしました。しかしゲームは継続されているので、残りの五人、すなわち僕、リョウタ君、エリカさん、チイさん、アイリスさんの中に少なくとも一人は人狼がいることになります。それでは次に、僕が狼でないこと

を証明いたしましょう」

C「客観的に証明するのですね」チイがアメンボに確認した。

A「はい、もちろん僕は自分^{アメンボ}が狼でないことは知っています。でも、ここで主張したいのは僕以外の人でも、僕が狼でない事実を論理的に導けることです。それでは、僕が狼であると仮定してみます。皆さんご存知のとおり、初日から三日目までは僕の同居人から死者が出ていません。そして、四日目に僕と同居したリョウタ君が死んでいます。僕が人狼ならば、初日から三日目までのいずれかで仲間の人狼と同居することでパスを消費しないようにする必要があります。すると、三つの可能性が出てきます。まず、初日の同居人エリカさんと僕が狼である可能性と、二日目の同居人のリョウタ君と僕が狼である可能性、そして三日目の同居人のピースさんと僕が狼であるという可能性です。しかし僕とリョウタ君が狼だという可能性は、四日目の宿泊で僕とリョウタ君が再び同居した際にリョウタ君が死んだことが説明できません。したがって、この可能性は除外できます」

E「そうね、アメンボさんとリョウタ君の人狼ペアはあり得ないのね」エリカが頷いた。

A「さらに、ピースさんが狼でないことも証明されているので、僕とピースさんが狼だという可能性も否定されます。したがって僕が狼であるためには、エリカさんが狼でなければなりません。でも、この場合でも僕は二日目と三日目の両方でパスはできないので、必然的にどちらかの日はパスを消費していて、もう一方の日は妖狐に噛みついて飢えをしのいでいることになります。そうすると今度はエリカさんの二日目と三日目の同居人から死者が出ていないので、エリカさんがパスを二回していることになり矛盾します。妖狐は僕が噛みついてしまったので、エリカさんが妖狐を利用することはできないからです。つまり、これで僕が狼である全ての可能性が否定されたので、僕は狼ではありません！」

F「ちょっと待ってください。アメンボさんとエリカさんのお二人

の人狼説ですが、今の説明ではまだ水が漏れていますよ」突然、フオックスが口を挟んだ。F「アメンボさんは初日に人狼のエリカさんと宿泊してパスの消費はなし。二日目のリョウタ君と三日目のピイスケさんとの宿泊では、どちらかで妖狐に噛みつき、もう一方の日にはパスをしている。そして四日目にはリョウタ君を噛み殺した。一方、人狼のエリカさんですが、初日は狼同士の宿泊なのでパスは消費しません。エリカさんは、二日目と四日目にチイさんと同居しています。四日目にチイさんが死亡しました。このことから、チイさんは狼でないことがわかります。さらにチイさんは妖狐でもないから、エリカさんは二日目にパスを消費していることになります。ここまではいいですよ」フオックスがアメンボに確認した。

A「はい、そのとおりです」アメンボが答えた。

F「私が指摘したいのは、エリカさんの三日目の同居人であるリョウタ君が三人目の狼である可能性をまだ潰していないということです。つまり、リョウタ君が狼であれば、エリカさんは三日目にパスの消費をしなくてすみすからね」

A「おおっ、ご指摘ありがとうございます。僕とエリカさんアメンボの人狼説を否定するためには、リョウタ君が三人目の狼である可能性も潰さなくてはなりませんね。もちろんこの可能性は簡単に排除できません。四日目にリョウタ君が僕アメンボと同居して死んだことが、僕とリョウタ君の双方が人狼であることを否定するからです。したがって、僕とエリカさん、リョウタ君の三狼説も排除されますから、僕は狼ではありません！」アメンボはさらに説明した。

I「アメンボさん、すごい。これで三人も除外しちゃったよー」

C「感動しちゃいましたあ」私とチイは手を取りあって、はしゃいでいた。

A「ははは……、ありがとうございます。じゃあ次は、エリカさんを人狼の嫌疑からはずしましょう。では例のごとく、エリカさんが人狼であると仮定してみます。エリカさんは二日目と四日目にチイさんと同居しました。そして、チイさんは四日目に死亡しています。

以上のことから、チイさんとエリカさんが同時に狼である可能性はあり得ません。よって、エリカさんが狼という仮定の下ではチイさんは狼でないことになります。先ほどの証明で僕も狼ではありませんから、エリカさんは初日の僕と二日目のチイさんのどちらかの宿泊でパスを一つ消費していなければなりません。さらに、僕かチイさんのどちらかが妖狐であり、エリカさんに噛みつかれていることになります。そして、三日目のエリカさんの同居人であるリョウタ君が狼でないとエリカさんのパスが二回となり矛盾しますから、リョウタ君は狼であります。しかしリョウタ君は、初日にピースケさんと、二日目に私と同居しています。妖狐はすでに噛まれており、なおかつピースケさんと僕は狼でないことが証明されていますから、今度はリョウタ君がパスを二回消費していることになり矛盾です。よってエリカさんも狼ではありません！」

I「きゃー、アメンボさん、素敵ですう！」私は悲鳴を上げた。

C「あいちゃん、そろそろ私たちが責められる番ですよ……」チイが背中をつついてきた。

A「ここまで来ると、リョウタ君が狼でないことを証明するのは簡単です。リョウタ君が初日と二日目と三日目に同居したピースケさんと僕とエリカさんはいずれも狼でないことが証明されているので、リョウタ君はパスを少なくとも二回消費することになり矛盾するからです」

I「ということは……？」私が呟くと、

C「はい、あいちゃん。つまり……、私たちが人狼だってことが証明されちゃいました！」チイはうなだれた。

A「そのとおり！ 五日目の朝の時点で、全ての参加者が辿りつける結論は……、チイさんとアイリスさんが共に人狼であることです！」

I「そんなあ、チイちゃんと私のどっちか単独狼ってこともあるでしょう？」往生際悪く、私は反論してみた。

C「あいちゃん、単独狼説はちょっと無理があるかも……。私の宿

泊相手が、初日と三日目があいちゃん、二日目と四日目がエリカさんなの……」チイはすっかり観念していた。

A「そうです。チイさんとアイリスさんは初日と三日目に同居していて、しかもお二人ともご健在でした。つまり、お二人のうちで一人だけが狼であると仮定すると、相手は妖狐でなければならなくなり、さらにその狼は一回しかできないパスを使い果たしていることになります。ということは、チイさんが一人だけ狼であるとする、二日目のエリカさん（彼女は人狼ではありません）との同居が説明できなくなるし、アイリスさんが一人だけ狼だとすると、四日目の宿泊が説明できません」

C「あっさり、証明されちゃいましたね」チイは肩を落とした。

I「いいのよ、チイちゃん。二人で仲良く狼してきたんだから、ばれちゃったけど悔いはないわ……」私はガンといい張った。

G「あのお、私も仲間だったですよ……」淋しそうにグレイが呟いた。

P「つまり、五日目の朝の時点で、生き残った俺たち五人全員は次の二つの事実を知っていたということですね。一つは、生き残りの人狼がアイリスさんただ一人であること。もう一つは、エリカさんが能力を失った祈禱師であること」ピースケが確認してきた。

A「うーん、皆さんが理性的であれば辿りつける事実なのですが……」アメンボはちらっとエリカに目を向けた。

E「私……？ そんな所まで、わかるわけじゃない！」エリカは両手のひらを広げていった。

P「まあ、エリカさんを除いて、ほかの四人は知っていたということですね」ピースケが再確認した。

E「ちょっと、待ってよ。じゃあ、その日の投票でなんで私が吊るされちゃったの？」エリカが首を傾げた。

S「ふふふ、めいめいの利害が錯綜したみたいですね」シノが気味悪く笑った。

G「そうですよ。五日目の投票の時、皆さん一人一人は一体なにを

考えていたのですか？」 그레이が真面目な顔で訊いてきた。

A「じゃあ、投票した順番に当時の思惑を語っていただきますようか。まずは、シノさんからお願いします」 アメンボがシノに向かっていった。

S「はい、私は狂人です。人狼チームの勝利を目指しています。もちろん、アイリスさんがただ一人の人狼の生き残りであり、彼女が死んでしまえば私たちが敗北することも知っていました。前の晩に死者を出された方はアメンボさんとエリカさんでしたから、当然アイリスさんを守るために、私はエリカさんかアメンボさんに投票することになります」

E「だから私に投票したのね。じゃあ、次は？　ピースケさんね」
エリカがいった。

P「はい。俺は妖狐です。勝利のためには、アイリスさんを殺すか、村人側を全滅させるかの選択肢がありました。ところが、シノさんの正体で悩みました。恐らく狂人であろうとは推測できましたが、村人側である可能性もありました。そこで、エリカさんを吊るして村人側を減らすよりも、手っ取り早くアイリスさんを消すほうがよいと判断して、アイリスさんに投票しました」

A「正しい推論だと思います」 アメンボがフォローした。

E「私の番ね。ひょっとして私がミスをしちゃったのかしら……？
祈禱師の私にはチイさんが狼だってことがわかるから、当然アイリスさんが狼であることもわかったわ。アメンボさんが妖狐を殺したといったから、あとは人狼を消せば私たちの勝利よね。だからアイリスさんに投票したのよ！」 エリカが強い口調でいった。

A「僕の判断ミスだったかもしれませんね。僕はアイリスさんに罠をかけたのです。僕は祈禱師でした。だから、アイリスさんが僕のことを霊能者だと思いこんで、僕を消しにかかることをひそかに期待したのです」 アメンボがポツリと呟いた。

I「恐ろしい策略ですね……」 私は本音を吐いた。

A「結局、僕は五日目の投票でアイリスさんを吊るすチャンスはあ

ったのに、実際は吊るすことができませんでした。アイリスさんを吊るせば人狼が絶えますからその時点でゲームが修了します。しかし、もしシノさんとピースケさんのどちらかが妖狐だったら、僕たち村人側も同時に敗北を帰するのです。直感ですが僕はお二人のどちらかが妖狐である可能性は高いと感じました」

I「だから、エリカさんに投票されたのですね！」私はチラッとアメンボの顔を見た。

E「待ってよ、だったら自分にでも投票しておけば決選投票になったじゃない！　なんで、わざわざ私に投票したのよ！」エリカは怒っていた。

A「そうですね。リスクはありますが、それもありましたね。とにかく、僕はアイリスさんには投票したくなかった。かといって、シノさん、ピースケさんに投票してはあまりにも不自然で、これでは仕かけた罠も簡単にばれてしまうでしょう。そこで僕はあえて票を割るという形で、エリカさんに投票する選択を取りました」

I「結果的には、ピースケさんが妖狐として生き残っていたから、それは正しい選択だったわけですね」私はいった。

E「じゃあ、最後の質問よ。アイリスさん――、あなた五日目の部屋割りの時になぜピースケさんを選んだの？　結果的に上手く勝利を収めたわけだけど……」エリカが私につっかかってきた。

I「はい、あの時私が知っていたことは、私が最後の人狼であること。エリカさんが祈禱師であったこと。そして、もう一つ……。私が最後の人狼であることをみなさんが承知していたであろう、ということです！」

E「確かに私もあなたが人狼だと確信していたけどね」エリカが頷いた。

I「では、五日目の投票を思い出してみましょう。最初の投票者はシノさんでした。彼女はエリカさんに投票しました。そして次の投票者であるピースケさんは私に投票しました。その瞬間、私は混乱しました。ピースケさんの私への投票は全く予想外だったからです」

私はピースケをのぞきこんだ。

P「俺が妖狐であることに気づかなければ、俺の行動は予想できないでしょうね」ピースケはあっさりといった。

I「次にエリカさんですが、エリカさんは自分の命を助けたいから私への投票は当然です。そして、アメンボさんです。アメンボさんがお昼の会議で述べられた霊能者であるというコメントが真実ならば、妖狐はすでに死んでいるので、私を吊るせば村人側の勝利が確定します。ところが、アメンボさんは私ではなくてエリカさんに投票しました！なぜでしょうか？」

S「アメンボさんの霊能者だというコメントが嘘ということですね」シノがあっさり指摘した。

I「はい。そのとおりです。そこで私はもう一度考え直してみました。アメンボさんは霊能者ではない。では、アメンボさんは狂人なの？ だったら四日目に同居したリョウタさんの死因は自殺だったといえばいい。わざわざ自分が霊能者だとコメントしてなんの得があるのでしょうか？」

P「確かにリスクだらけだ！ なにしろ妖狐の俺にはアメンボさんが嘘をついたってわかつちゃうし、霊能者であると宣言すれば初日の夏の間で起こった事件をみんなに説明しなければなくなる。その時、ドロシーさんと 그레이さんのどちらが人狼なのかをうっかり間違えて説明すれば、肝心のアイリスさんにも嘘がばれてしまう……」ピースケが同意した。

S「でも、アメンボさんには確信があった。ドロシーさんが牧師で、 그레이さんが狼だという確信が……」シノがアメンボに目を向けた。

A「いろいろな証言を総合すると、なんとなくですけど確信はありましたね」アメンボは弁解した。

I「私は考えました。自分が霊能者だと偽って得をする職業は、祈祷師か妖狐しか考えられません。ただ、アメンボさんが妖狐だったら、五日目の投票で私を吊るして一人勝ちです。なのに、彼は私を吊るさなかった。つまり、アメンボさんの正体は祈祷師です！そ

して、妖狐は恐らくまだ生きている。それはピースケさんかシノさんのどちらかです！ 私がしなければならぬことは、妖狐をあばき出すことだったのです！」

P「アメンボさんの嘘が逆手に取られてしまったわけですね」ピースケがいった。

I「私はシノさんとピースケさんのどちらが妖狐であるかをもう一度考えてみました。そこで集団暴力投票リンチでのお二人の行動に着目してみました」

P「なにか出ましたか？」さりげなくピースケが訊ねた。

I「はい。はっきりと……。まずシノさんですが、彼女の投票からは妖狐らしさがなにも感じられませんでした」

G「ちょっと待ってください。シノさんは四日目の投票で私を吊るし上げる決定打を放っていますよ！」 그레이が真面目顔でいった。

I「그레이さん。よく思い出してください。シノさんが그레이さんに投票した理由は、自分が生き残るためです。極めて自然な行爲です。そしてその直後のピースケさんの그레이さんへの投票こそが、그레이さんを吊るし上げた決定打です！」

G「なるほど……。いわれてみればそうですね」 그레이は納得した。
I「ピースケさんの投票にはかなり癖があります。三日目、四日目の投票ではいずれも吊るし上げる決定打を放っています。そして、五日目の投票では最後の人狼である私を吊るアイリスそうとしています！」

投票で常に人を減らしたがるのは、第三勢力である妖狐の典型的な特徴だと思っています」

P「俺の投票に癖があったって？」 ピースケはうろたえていた。

I「以上から導かれる結論は、アメンボさんが祈禱師、シノさんは恐らく狂人、そしてピースケさん――、あなたが妖狐だということです！ 運よく私は五日目の部屋割りで指名権を得ます。私が指名すべき人物は誰でしょうか？ アメンボさんを指名して同居すれば、パスができない私はアメンボさんを襲うしかありません。それではかえりうちでアメンボさんに殺されてしまいます。したがって、ア

メンボさんの指名はできません。次にシノさんですが、彼女と私が同居すれば私はシノさんを襲うしかできないので、味方のシノさんを殺してしまいます。そうなれば、私がゲームで勝利することは絶望となります。なぜならば、集団暴力投票でピースさんを吊るせても、そのあとでアメンボさんと同居してかえりうちされてしまうし、集団暴力投票でアメンボさんを吊るせば、その瞬間に村人が全滅して妖狐のピースさんが一人勝ちとなるからです。故に、私が五日目の夜に同居できる人物はただ一人――それはピースさんです！」

A「まさにとどめの一撃ですね。今のアイリスさんのコメントは……」アメンボが感心した。

P「くくく……、どうやらあなたを見くびってしまったようですね」ピースケが急に笑い出した。

B「アイリスさんが聡明な女性だということは、前回のゲームに参加していない人にはちょっとわからないでしょうな」ボスが得意げにいった。

G「天然ボケのオブラートに包まれた聡明さですから、最初は誰でも油断してしまうでしょう。我々の勝因はアイリスさんの五日目の部屋割り指名権ですね。アイリスさんの驚異的な強運のおかげです！」 그레이が叫んだ。

C「 그레이さん……。 あいちゃんの驚異的な推理力のおかげってあげたほうが……」 小声でチイが囁いた。

G「うーん、推理力というよりも彼女の場合は鋭い第六感ですよね。女の勘って怖いからなあ」 그레이は一人で納得している。

B「聞き捨てならないですね。前から申し上げているとおり、アイリスさんは実は聡明な女性で、彼女の判断は決して思いつきではないですよ」ボスが一步前に出た。

G「これはまた聞き捨てなりませんね。聡明な女性といったら誰がなんといってもチイさんでしょ！ なんなら、また青猪亭で議論しますか？」 그레이も負けていない。

B「望むところですよ。前からあなたとは決着をつけたいと思っていました」

G「おお、そうだ。チイさんもごいっしょにいかがですか？ 青猪亭……」突然、グレイがチイに目配せした。

C「ええっ、私ですか？ えっと、どうしょっかな……」不意をつかれたチイは、まごついていた。

I「はいはい、チイちゃん。難しい議論は不良中年たちにまかせて、こちらはカフェ・シエスタで反省会にしましょうね」私が助け舟を出す、

C「あっ、あいちゃんとデートですね。光栄です」チイがうれしそうにいった。

G「ええっ、では私もぜひデートに……、いや、その反省会とやらに……混ぜてください、お願いします！ あっ、チイさん、私のことはどうぞ下僕とお呼びください」グレイは必死だ。

B「アイリスさん、前にも申し上げましたがリアル私の私は決して中年ではなくて……」ボスも泣きそうな声で訴えている。

I「はいはい。じゃあ、ついて来ていいけど、カフェの代金はあなたたち二人で払ってもらいますからね！」私はきっぱりといい放った。

C「あらあら、あいちゃん、ちゃっかりしてますね」後ろでチイが微笑んでいた。あどけない笑顔で……。

(完)

感想戦（後書き）

ようやく解決編を書き上げることができました。前回の「小説・人狼ゲーム」に比べて、今回の作品は登場人物も多くなり、より複雑に、より面白くを目指しましたが、最後が尻すぼみになってしまいました。でも、書いていながらすごく楽しめた作品です。みなさんのご感想をお待ちしております。

i r i s G a b e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4266/>

続、小説・人狼ゲーム（解決編）

2010年10月31日02時04分発行